
ラピスラズリの姫君

瀬戸 希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラピスラズリの姫君

【Nコード】

N5583S

【作者名】

瀬戸 希

【あらすじ】

別にあのままでも良かった。

自分がどんなに不十分な身であっても、笑ってくれるのであれば自分の泣き顔もこの疎外感も隠して生きていけたのに……。

あれが現れ全てを踏みにじられ、隠していたものさえ暴き立てられた。

だと言うのには私は私に笑えと強要する。

初投稿であらすじ詐欺な気もしますが大目に見てください。

リアーナの政略結婚

ランフォート王国

ハルト大陸の中央に位置する小国であり、周りを大国に囲まれているながらも

場所の利便性と周りを大国に囲まれていることを利用して商業で周りの大国を牽制している強かな国である。

その王宮の本来なら音を吸収する柔らかな赤い絨毯の上をバタバタを音を立てて早足で歩いて行く者がいる。

これが侍女などであったならその場でお叱りを受けるところだが、音を立てて歩いている本人はランフォート王国のただ一人王子であり、

いつもは柔らかな微笑みを浮かべていることが多い顔には不機嫌さがありありと出ているからか

眉を潜められることはあってもそれを咎めるものはいない。

むしろ、何か緊急の事態でも起きたのかと回りを不安にさせていた。

王子は、金のバラで縁どられた白いドアの前まで来るとノックもせずに勢い良くドアを開け、

目当ての人物を見つけるとその少しの距離さえも腹立たしいかというように間を詰めた。

目当ての人物である、金色のゆるいカーブをかけた腰までの髪の毛の20才前後の女が

髪と同じ金色の睫毛に縁どられた零れそうなほど大きな瑠璃色の目をこれでもかと大きく開きながら入ってきた人物を見ていたが入ってきたのが誰か分かるとゆっくりと肩の力を抜き

「行儀が悪いわよ、ミカエル。いくら兄弟だと言っても……」

「姉上！ 今は行儀だとかそんなことはいいのです。」

“あの”極悪非道で冷酷卑劣な悪魔と噂されるキールライン王国のルイス王子とご結婚なさるのですか？！」

「ええ、ミカエル。ずっと前から決まっていたことよ」

「そんな！なぜもっと早く教えてはくれなかったのですか？！

私ではそのような重大なことを話すには値しないということなので
すか？」

それが本当の話であり、昨日今日決められた話ではないと突き付け
られたミカエルは目を見開き

姉と同じ瑠璃色の瞳に涙を浮かべてリアーナに詰め寄った。

リアーナは必死の形相で縋りつくミカエルに悲しそうに微笑みなが
らあえて明るい声で

「ミカエル、私は大丈夫よ？ 心配しないで？」
と言った。

「しかし……！」

食い下がるミカエルをリアーナは彼の栗色の前下がりショートボブ
の髪を撫でてなだめながら

幼い子にそして自分に言い聞かせるようにことさらゆっくりと優し
く言っ。

「ミカエルよく聞いてちょうだい。キールラインの王子の噂を耳に
ただけでしょう？」

ただの噂にすぎないのよ、彼と実際に会ってみなければ人柄を判断することはできないわ。

噂はあてにならないことをあなたは一番知っているでしょう?」

ミカエルもキールラインの王子のことは噂を耳にただけで実際には見たことがない。

ミカエル自身リアーナの心の広さとおっとりしていながらも

肝心なところでは頭の回転が速い姉を尊敬していたし姉の言葉にも一理あると分かっていた。

そう。本当に噂というものはあてにならないものだ。それが、悪いものならばなおさら・・・。

ただ、噂というものはたまに真実か真実の一部を伝えていることも多いことも良く分かっていた。

リアーナの政略結婚（後書き）

もし何か誤字脱字がございましたらお知らせ下さい。

初投稿でまだ何もほとんど始まっていないという……。気長に見
ていただければ幸いです。

塗り替わる日

どうしてこうなったのか・・・

白で満たされるべきこの日

目の前は紅く

黒く濁ってゆく。

笑顔と祝福で満たされるべきこの日

歪み怒号と悲鳴だけが支配する

姉の婚礼は恙無く進んでいるはずだった。

何がいけなかったのだろう。

今日まさに輿入れするというのは

その時になってなぜ手のひらを返したように我が国を蹂躪するのか・

・

我が国の貿易網が欲しいのは分かる。

しかし、軍事力だけではなく医療にも秀でているあの国が

まるでどっかの蛮族のように騙し討のような事をしてまで欲しい物
だろうか。

我が国を支配下においたところで、戦争の傷跡はすぐには癒えない。
城から見える景色は空の蒼ささえ紅くするように燃えているのだから
ここまで壊しては商人たちが集まって商談をする事もなくなるだろ
う。

わざわざこの利点を潰すようなマネをしてまで
キールライン王国は何を欲している？

ただ分かっていることは、城はすでに落ちもつすぐ花嫁を迎えに
ルイス・キールラインがここにやってくるということだけだ。

本当に娶るつもりで来るのかそれとも

死の神に娶らすために来るのかは疑問だが

国王である父上も王妃たる母上も捜すが見当たらない。

すでに殺害されたか捕虜となつてどこかに連れて行かれているのか
もしれないし

安全な場所に避難しているのかももしれない。

この場合、後自分にできることはきつとあいつが娶る気はないであ
ろう姉を逃すことだ。

もうすでに逃げていてくれればいいが、きつとあの人のことだから
逃げずに自分の部屋でいるのだろう。

見慣れた金のバラで縁どられたドアを開ける

ああ・・・やっぱりいた。

お付きの侍女は全て逃がしたのだろう。

ただ一人

白い我が国の結婚衣装を着て本当は怖いだろうに怯えていることを
おくびにも出さず座っている。

リアーナは入ってきた人物が意外だったのか

めずらしく酷く焦った声で

「ミカエル。あなたなぜ?!早く逃げなさい!!」
と言った。

「いいえ。私は王子です。国を背負う者、逃げるわけにはいけない。

姉上こそお逃げください。攻めてきたのはあのルイスです!

噂は本当だった・・・。

ある意味噂よりもひどいのかもかもしれませんね。
口では表し様がない。

このままでは姉上はきつと殺されてしまう。「
どうか、この言葉で逃げて欲しいと祈り言うが

「いいえ・・・私は逃げるわけにはいかない。
きつと婚約者である私はまだ見逃してくれるでしょう。」

「そんな心優しいものだとは思えません!!」

「私もまた王女として国を背負わなければならない。
だから、子供を産みこの血を残すの。」

それも、確実に王となる者に血を・・・。
だからこそ、私は残るのです。

それよりも王子であるあなたは逃げなくては!!
王子として国を背負うのならば今戦って死ぬのではなく
今生きてこの国を再興させなさい。

もし、私が血を残せなかつたときのために
あなたは生きなければ!!」

自分は今もうずっと前にこの国を諦めたというのに
姉はこの状況の中でさえまだ諦めていなかったのか。
むしろ、姉はキールライン王国の王に自分の子をつけようとしてい
る。

もし、子が王になれば上手くいけば母として
この国を再興させることもできるかもしれない。
傀儡の王として自分が政権を握ることも夢ではない。
または、その血を残すことで

我が王家は歴史上から消えようとも
キールライン王家として存続させられる。

王女としての考え方としては素晴らしいのかもしれませんが
ふだんは頭の回転が速いといってもおっとりしており
悪口さえも殆ど言わない。

言ったとしても悪口に入るのかどうかさえ怪しいその人の
その言葉の暗さにいつもの姉と比べてしまい別人のようで恐ろしく
なった。

ただ、恐ろしくて黙って見つめていると

「ミカエル様！もうすぐそこに敵兵が！」
部屋の外を見張らせておいた護衛が叫んだ。

その声で我に帰り、今は悠長なことを考えている場合ではない事に
気づき

「姉上分かりました。私は逃げます。

ただ、私一人が逃げる気はありません。

あれが、本当に姉上を娶るといふ保証がない以上
姉上も一緒に逃げていただきます。」

「さつきも言っただように私は！」

「分かっています。だからあれが本当に姉上を娶るのなら置いてい
きますが

娶るよりも殺すほうが確率が高いと判断したからこそ一緒に逃げる
のです。」

「2人で逃げればすぐに追いつかれ・・・」「ミカエル様！！」「
姉の言葉を遮って兵が叫ぶ。

思っていたより時間はないらしい。

「姉上。時間がありません。嫌と言っても無理にでも来ていただきます。」

姉上が嫌がればその分進行が遅くなり危険になります。

姉上ならお分かりでしょう？だから大なしく一緒に逃げてください。

「

これはただの脅しだと分かっているし、
きつと一緒に逃げてはすぐに追いつかれるだろうことも分かっている。

それでも、一縷の希をかけて姉を逃したかった。

そして何よりあの姉の言葉を本当にはしたくはない。

駒しての王など虚しいだけだ。

未だ迷っている姉を抱え廊下を走る。

確か、王女付きの侍女が住まう部屋に隠し通路があったはずだ。

なぜ、王女の部屋でなく侍女の部屋なのかは

多分少しでも通路の発覚を恐れるためか

はたまた、昔の侍女が外で誰かと密会するために作ったか・・・。

やっと次女の部屋までたどり着き

後は隠し通路を探すだけと言う時に

入る一瞬を見られたのか少し遠くで

「そこだ！ まだ生きている者がいる！」

と声がした。

自国の兵かと頭をよぎったが

そんなはずはなかった。

ドアの隙間から覗けば

羽を広げた獅子と剣の紋章、キールライン王国の兵だ。

「生きるのよ！ 私は大丈夫だから！！」

そう言うと私の腕の中でおとなしくしていた姉はいきなり暴れ始め腕の中から逃げ出し

キールライン王国の兵の前へ

「私はリアーナ。リアーナ・ランフォート。ランフォート国の第一王女。

私をルイス・キールラインの元へ案内しなさい。」

そう叫ぶように言う姉をドアから飛び出して連れ戻そうと動くが

「ミカエル様！！いけません！お早く！

リアーナ様のことはお諦めください。

何のためにリアーナ様が敵兵の前に出られたとお思いですか？

リアーナ様のお心を無碍になさいませんよう。

さあ、通路が見つかりましたお早く中へ。」

押し殺した声で護衛が言うが、諦めきれず叫ぼうとするも

口を抑えられ叫ぶこともかなわず暗く湿った通路の中へ連れられていく。

別にこの生命などどうでもいいというのに。

この国などもうとうの昔に諦めているのに。

なぜお前たちは私を生かそうと思うのか。

なぜ、この国を諦めきれないのか。

私を生かしたとて意味など無いのだと早く気づけばいい。

塗り替わる日（後書き）

第2話更新です。

第3話でルイスさんが登場する予定です。

なんだか意味のわからないような感じになってきましたが。我慢して読んでいただければと（；、、（

誤字脱字ございましたらご報告お願いします。

馬鹿馬鹿しい(前書き)

ルイス・キールライン視点

馬鹿馬鹿しい

馬鹿馬鹿しい

今日この日を一言で表すとすればこれしか無いだろう。

むしろ、他の言葉で表せと言われても無理なほどにこれにつきる。

そんなことを考えて

ため息を吐きたくなる。

戦争は嫌いじゃない。

むしろ好きな部類に入る。

だが、勝てるか勝てないかのやりとりを命を賭けるあのスリルが楽しいのであって

最初から勝敗が分かっているものなど何ら面白みもない。

ただ面倒な処理に追われるだけだ。

「さて、いい加減ミカエル・ランフォートがどこから逃れたか教えて欲しいのだが？」

それでも、元婚約者として優しくしてるつもりだ。

何せ、そこらの兵士に下げ渡さずに

安全なところにいるのだから敗戦国の元姫としてはとしては格別の待遇だ。

それに、あなたが出てきたあたりに居るだろうということは分かっている。

しかし、どうもうちの者はそういうものを探すのが苦手らしい。

あいつら最初にミカエル・ランフォートと同じ髪をやつの死体の首持ってきて

これがミカエルだいやこいつがと・・・正直持ってきたやつ（首）
そ落としたくなった。」

唇の端を少しあげ目を眇めて言ってみせる。

目の前の女

ミカエルランフォートの姉にして元婚約者リーナ・ランフォートは
元々白い顔を青白くさせながらただ

ランフォート王族特有の瑠璃色の眼で見つめてくる以外にない。

まあ、失神せずに見ているだけでも女にしては素晴らしいと褒めて
やれないこともないが

正直、失神しようが狂おうがさっさとはいて欲しい。

そもそも、王女と王子は無傷でとかいらん注文をつけてこられたこ
とで

余計に手間取りややこしくさせているのだ。

これが、まだ体だけの無傷を指していたのであれば

もう少しやりようもあるのだがそうもいかず

さっきからほとんどこの繰り返しでしかない。

ただ変わったことと言えばは自分の話がどんどん長くなっていつて
いるだけか・・・。

この堂々巡りを終わらす手段が見つからず天井を見上げながらついに
はあっとため息をこぼした。

本当に馬鹿馬鹿しい。

馬鹿馬鹿しい（後書き）

ルイスさんが登場させられました。なんだか文章的におかしいのです。のうち直すかと……。もし誤字脱字ございましたらお知らせください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5583s/>

ラピスラズリの姫君

2011年4月19日22時36分発行